

猫かわら版



ある夜、米屋の優男のゆきが急に苦しがり、泡を吐いて今にも死にそうだった。又たび屋の飯炊きのごん介がネズミにもった毒団子を食して死にはぐれにあらう。

三吉がゆきを隣の路地に逆さに落としたのを見た下女のおたきが告げ口。それで三吉は奥へ呼ばれて女房に叱られる。これも敵討ちの引き金となる。泣く泣く三吉。その姿を見て、飯炊きのごん介が気の毒がついている。なにかわけがありそう。

【ところは変わって、月夜の物干】
猫たちが酒盛りをしている。肴は猫仲間の頭のぶちが手に入れた鯛。月夜になると物干しで酒盛りをする。ぶちの隣家は猫嫌い。流しにネズミが出るので狙っていたら、人間にぶちのめさ

れた。いつか仕返しをしてやろうと思っていたところ、流しに鯛があつて捕ってきたのである。それがあんまり美味しいからと、仲間を呼び出したところだった。呼ばれた大工のきじは「ありがてえ、とよみけを呼びにやろう」と、屋根伝いに新道のとよみけにも声をかけると、尻尾を振ってやって来た。「おやおや、誰だと思えば、きじさんか。もし、ぶちさん、いつお帰りだえ」ぶちは箱根付近で遊んでいたのだった。ぶち、きじ、とよみけの三匹の酒盛り。そこに米屋のゆきが匂いをかぎけてふらふらとやって来た。とよみけが「ものあたりでも、なすつたのかえ」「いやはや、死にはぐれにあいやした。やせた理由を仲間に尋ねられ

て、ゆきは話し始める。「うちは米屋なのに飯炊きのごん介にいい加減に米を研ぐものだから流しのどぶに鼠が出る。ガキどもが騒ぐから鼠は逃げる。

【解説】江戸時代、鼠害には苦慮していました。とくに養蚕では死活問題で、鼠対策として猫を飼い、しかも放し飼いが当たり前でした。そのため何度も行方不明になるのが悩みだったという記録もあります。

